

招待したことを思い出す。教授は英語が不得意で、フランス語とチャンポンでぼつぼつと語り合ったものである。ポケットから一人娘のお嬢さんの写真を取出して見せてくれた。

2 回目に Stoyko 教授にお会いしたのは、1972 年 10 月、私がパリ天文台に 1 週間ばかり滞在した折である。教授はすでに退官され、名誉教授の資格で毎日出勤して来られ、御夫妻でささやかな研究室にとじこもり研究を楽しんで居られた。この時、私の突然の訪問をことのほ

か喜んで下さった温顔がいまも忘れられない。写真はこの時、パリ天文台屋上で撮ったものである。

教授へ宛てた英語の手紙は、必ず自筆のフランス語の手紙となって返信された。特徴のある字体ではあったが、構文は私にも比較的判り易いように気が配られていた。もうこれからは、こんななつかしい手紙を受取る機会はさらさない。このささやかな一文をかりて、心から哀悼の意を捧げると共に、教授の御冥福をお祈りする次第である。

掲 示 板

東京大学理学部天文学教室公募

下記により公募いたします。希望者の応募、適任者の推薦をお願いいたします。

1. 公募人員……教授 1 名
2. 専門分野……天文学
3. 就任時期……昭和 52 年 5 月以降のできるだけ早い時期
4. 提出書類……履歴書、研究論文リスト、推薦書(他薦の場合)。
5. 締切期日……昭和 52 年 2 月 20 日
6. 宛 先……(〒113) 東京都文京区弥生 2-11-16
東京大学理学部天文学教室主任

海野 和 三 郎

京都大学理学部宇宙物理学教室助教授公募

下記により助教授 1 名を公募致します。

京都大学理学部宇宙物理学教室主任

加 藤 正 二

記

1. 公募人員 助教授 1 名
2. 専攻分野 天体物理学
3. 提出書類 履歴書、研究歴、論文リストおよび主要論文別刷、今後の研究計画書(着任希望時期を含む)
4. 公募締切 昭和 52 年 3 月 15 日
5. 宛 先 京都市左京区北白川追分町 (〒606)
京都大学理学部宇宙物理学教室

加 藤 正 二

書 評

教師のための天文学

北村正利 監修・尾形 斉 著

(B5 版・本文 171 頁・付図 21 枚・恒星社版・定価 3,500 円)

理科教育の中で天文の指導は最も困難なものの一つで

はなかりうか。実際に指導に当る教師を対象にした研修の場として、都道府県単位に教育センターが設置されている。しかしそのセンターでさえ満足に研修できるような状態ではないようである。天文月報には、毎年春秋の天文学会と時を同じくして開催される天文教育懇談会の記事が掲載されるが、これを見ても天文教育がいかに困難であるかをうかがうことができる。

本書は、著者が昭和 51 年 3 月末まで勤務されていた神奈川県立教育センターでの経験を元に書かれたものである。

第 1 章：空と星座，第 2 章：地球，第 3 章：恒星・月・太陽の日周運動，第 4 章：太陽，第 5 章：月，第 6 章：惑星と太陽系，第 7 章：恒星と銀河系，第 8 章：天体望遠鏡の各章と、付録から成っている。

第 1 章では、空の色に始まり空から得られる情報、屋間の星、星座の話へと続く。第 2 章では、地球の曲率、地球の大きさ、地球の自転・公転の証拠、質量の測定などが説明されている。以下各章について、それぞれの範囲について簡単な数式を用いながら、図と表や実験装置(自作の可能なものを含む)により解説されている。随所に見られる実験装置は、著者独自の工夫によるものも多く、実際に大いに役立つものであろう。

さらに巻末に付けられた付録の内、同定用主要星座の 8 種は、透明ビニール板などに書き写すと、目から 30 cm 離して星空にかざすことにより目の焦点調節は必要であるが、わずかの間に星座の同定を可能にするであろう。東経 140 度の地における毎月 1 日の 20 時の方向が、図の周りに記入してあり大変便利であろう。その他、4 等星より明るい星を記入した星図、赤道座標から地平座標への変換図、赤道座標から黄道座標への変換図があり、さらにウルフネット(ステレオ方眼紙)も加えられている。

初版のせいであろうが、ときどき目につくミスプリント(例えば 65 頁の下から 7 行目の、赤経 4 時分は 4 時間分ではないか)は残念である。また項目が多いのでやむをえなかったのであろうが説明にやや飛躍が感じられるところも散見された。

結論としては、教育の現場にある教師の立場をよく理